

# シリーズ：進化し続ける産総研のコーディネーション活動(第36回) オープンイノベーション時代のコーディネータ

臨海副都心産学官連携センター

イノベーションコーディネータ さわだ みちこ 澤田 美智子

## オープンイノベーションの時代

ここ数年でわが国の企業は急速なグローバル化が進み、英語で社内決裁する日本企業も今や珍しくなくなってきました。自前の技術だけで研究開発をすることを望む企業よりも、互いに技術ニーズやシーズを公開して、より競争力を高める戦略を選ぶ企業が増えてきているのです。産総研でもオープンイノベーションを加速させています。産総研では学会発表やプレス発表、ホームページ掲載などによる一方向の情報発信はもちろん、ライフサイエンス分野ではBioJapanのような外部主催の展示会を利用し、技術と研究者の紹介やマッチングを行っています。多くの産総研成果を企業・大学などに紹介し、しかも相互理解して頂く場として、今年5年目になる産総研オープンラボが機能しています。今年のオープンラボは企業や大学などから2日間に延べ4,750人の参加者がありました。私はイノベーションコーディネータとして、企業・大学などとの連携、プロジェクトフォーメーションなどを通して、産総研の技術とそれを生み出す人材の育成、さらには技術の産業界などへの手渡しに努め、アウトカムとしてのイノベーション創出を目指しています。

## 技術を社会へ出す組織の研究職として

「技術を社会へ」。多くの産総研役職員のように、私の名刺にも産総研ロゴマークの下にこの言葉が入っています。どの講演スライドにも小さいとはいえ、「-技術を社会へ- Integration for Innovation」を入れています。さらに私は、ここ数年間、スライドの表紙に大きく「技術を社会へ」を記載しています。

前職の総務本部ダイバーシティ推進室では、一人ひとりが、その能力を最大に発揮できるように、新規休暇制度の設立やキャリアカウンセリングを導入し、より効果的に効率的に研究成果を出せるような職場環境整備に努めました。さかのぼって、産総研が発足した2001年には副研究部門長として研究ユニット内の研究を支援するとともに、研究部門の知財管理をしていました。企業・大学などとの連携の際は、知財部、産学官連携部署、TLOなどとそれぞれコンタクトして調整しました。現在はイノベーションコーディネータとして、イノベーション推進本部内の知的財産部やベンチャー支援室、ライフサイエンス分野研究企画室などと連携しながら、産総

研の技術を外に出しています。つまり、所内調整という11年も前と同じ作業を私はしていることになります。しかし、11年の間に産総研も確実に進化し、研修などにより研究者の知財に対する理解が進みました。また、2010年10月の改組によりイノベーション推進本部とイノベーションコーディネータ制度が発足して、同じ本部内に設置された知的財産部や産学官連携推進部などの部署との連絡がより密にできるようになりました。2012年にイノベーションコーディネータになった私は、産総研憲章や産総研知的財産ポリシーに基づいた提案を研究者と研究機関・企業などの双方に以前より早く提示することができるようになったと感じています。

## 産総研の技術を確実に社会に役立たせるために

産総研は公的研究所で、特許の不実施機関であるため、産総研の技術を企業に渡して製品として人々に使ってもらうことは重要です。企業と言っても、社長と顔を合わせる機会が多い企業と、研究開発本部長さえもが海外在住している大企業とでは、コーディネートの進め方が異なります。また、業種ごとや企業ごとに歴史風土が異なることも意識しています。結局は何をするにも人と人との付き合いの積み重ねによる相互理解が必須です。

時代の動きを絶えず感じ、そのメッセージをとらえつつ、研究現場に支持された組織対組織としての骨太な戦略的アライアンスの構築に挑戦しています。



打ち合わせ中の筆者（中央）